

看護人類学入門

Introduction to Nursing Anthropology

第5章

〈生殖補助技術時代の人間〉

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

Center for the Study of Communication-Design, CSCD

池田 光穂

IKEDA Mitsuho

1

日本の産科学について

- (1) 近代の産科学が生まれたときに、女性の専門医師はいなかった。
- (2) 産科学のみならず、近代医学の専門家の創始者と呼ばれている人は「すべて」男性でした。女性の専門家はいつも男性のその後塵を拝していました。女性ではじめての医師は、わざわざ「日本初の女医」と言われました。
- (3) 他方、多くの社会で助産、つまり出産を介助してきたのは女性とくに経験豊かな中年から高齢の女性でした。日本の産婆（さんば）という言葉にその名残があります。
- (4) 近代日本で産科学の教鞭をとったのは男性の産科医でした。また（近代）助産師の専門学校（「産婆学校」などと言われました）が生まれた、近代産科学が普及するにつれて、産婆や「トリアゲババ」（＝新生児を取り上げるお婆さんの意味）の弊害について熱心に吹聴したのは、男性の産科医たちや行政の関係者たちでした。

2

ポスト・ジェンダー論

- 社会的性をジェンダー、生物学的性をセックスと呼ぶ、性のカテゴリー区分の「近代的二分法」
- ジェンダーのみならず、セックス概念すら、異性愛を中心規範とする社会的想像力によって形成される。それゆえ、セックス概念の影響を受ける社会的特性概念であるジェンダーは、パフォーマティブな構成をされる。

3

出生力低下「問題」

- 日本の特殊合計出生率（人口統計資料を使って計算した1人の女性が一生のあいだに産む子どもの平均数）が1975年に2人を下回り、2005年に1.26人にまで落ち込んだときに、政府与党（当時）の国会議員たちは声高に国家存亡の危機を訴えました。

4

人工生殖に関する用語

- 人工受精
- 体外受精
- 受精卵移植
- 選択的中絶など
- それらを包括して生殖補助技術（assisted reproductive technique；ART：厚労省の文書では「生殖補助医療」と訳語がありますが明らかに誤訳）

5

『すばらしき新世界』 [1932]

- オルダス・ハスクリー（1894～1963）SF
- 西暦2540年の人間社会が受精卵の段階からガラス製の培養容器により育てられ、知能や容姿により階級が選別され、洗脳としての睡眠学習や不快感を解消する薬（ソーマ）が普及し、世界が10名の指導者により管理されているという、当時の人々には想像を絶する社会に変貌している姿を描く

6

生殖補助技術

- 人工授精
- 配偶者間人工授精
- 非配偶者間人工授精
- 体外受精
- 代理母 派生語としてのホスト・マザー

7

母親を代理母とする出産例

- 日本産婦人科学会は2003年4月代理出産を禁止する指針をまとめた。しかし長野県下諏訪町の不妊治療で著名な産科病院では2004年に子宮を摘出していた30歳代の娘夫婦から事前に採取していた精子と卵子を人工授精させ、ホルモン療法をおこない受胎可能にした50歳代の母親の子宮に移植し、2005年春に出産した。出産後、この母親はこの子供を実子として戸籍を登録した後に、娘夫婦と養子縁組した。また同じ医師は2007年に20歳代の娘夫婦の体外受精卵を50歳代の実母に移植し、実母は2008年2月に男児を出産した。後者のケースでは、実母が実子として出生届をおこなったが、娘夫婦との養子縁組において、戸籍上実子と同じに扱う特別養子縁組の申請を家庭裁判所に申し入れ、2009年1月にそれが正式に認められた。この医師はこの時点で過去に少なくとも8例の代理出産を手がけているが、それ以外の7例のものには特別養子縁組は却下されている。

8

「呪術的方法」

- 生殖のためのセックスでは、それに遡る男性の禁欲、性交の時間や回数やスタイルなどが、医学的に根拠がある無しにかかわらず、いろいろな知識が総動員されており、サブカルチャーとしてのジャンルを形成している。
- 男女の産み分けに関する方法についてもやはり、そこには一種の計画性と真面目さが要求されている。

9

血の原理に呪縛される

- わが国では、とくに後者の「血の共有」が強調されるので、さしあたり、これを「血の原理」と呼んでみてもよいでしょう。もうちょっと過激に表現すると「血のカルト」や「血液フェティシズム」と言ってもよいかもしれません。「血を分けた子供」「腹を痛めた子供」「血は水より濃い」「カエルの子はカエル」などという表現は、正確な遺伝の法則について言っているのではなく、「血の継承」という人々のイメージのことを言っているのです。人々はこの「血の継承」に飽くまでも執着します。たとえば、二世学者、二世政治家（現在では三世という家元なみの世襲化親族が登場しています）、二世タレント、二世スポーツマンなど、その事例には事欠きません。あるいは、源氏と平家をはじめとする名家の継承とその「違い」の強調があります。このことへの執着は単に、当事者間の利害の問題ばかりでなく、他人もそれを認めたり、否定したり、意見を交わすことを通して、人々は常に「血の継承」について話題にしているのです。

10

「血の原理」の超越とその困難

- ダライ・ラマは観音菩薩の化身であり、人間の姿を借りて次々と生まれ変わるという信仰が、チベットの人々に受け継がれています。先代のダライ・ラマ死んでから四十八日間の間に、新たに受胎されるものが転生した次の活仏であり、その間に生まれ変わった新たな王の候補が国中をあげて捜されたと言います。ダライ・ラマは人間的な生殖方法によって世継ぎを作らなかったので、はじめから「血の原理」の要素が入る余地はありませんでした。にもかかわらず、清朝下のチベットでは、ときにその遺産相続をめぐる混乱が起こり、候補者を抽選で選ぶを得なかったといえます。これは「血の継承」を乗り越えることがいかに難しいものであるかを見事に物語っています。

11

技術は誰のために

- 生殖補助技術は、私たちの行動様式や価値観が育ててきたものであることを、私は再度強調したいと思います。その上で、生殖補助技術のイメージがまき散らす暗黒面の芽を摘み、女性と男性とクイア（queer, オカマや変態）を含む私たちすべてがそれを快適に利用できたら、便利なものに違いないはずで

12